

## 「魔法の言葉」

明星学園 宮下 智

その昔、Mさんは名前を呼ぶと、その途端逃げていく人だった。それは呼ばれた時が必ず怒られる時だったからなのだが、そんな人間関係を変えたくて私はこんな工夫をした。

Mさんが近くを通りかかる。すかさず耳元に口を近づけて、Mさんにしか聞こえぬ声で「Mちゃん、だいすき！」とささやくという作戦だ。もちろん「好き」というこの上ないポジティブメッセージを伝えるというのが大きな狙いであるけれど、このMさんにしか聞こえぬ声でというところが大きな味噌で、この行為を二人だけしか知らない状態というが、二人だけの秘密という意識を育て、その秘密の雰囲気がある心の接近を保証するからだ。さらに、もう中学を卒業した年齢のMさんに、この時だけ「ちゃん付け」にするというのがもう一つの狙いで、彼の母親との死別という恵まれない成育歴を考えると、「ちゃん付け」で名前を呼ばれることが依存関係を醸成していくことに大きな効果を上げると考えたからだ。仕事をしたり、身辺のことをこなすときには、一人前扱いの「さん付け」、そして耳元でささやく「ちゃん付け」の名前、この落差がおそらく人間関係を変えていこうと考えた。

しばらくすると、この作戦は功を奏して、僕が近づくとMさんは手で自分の耳を引っ張りながら近づいて来て、「Mちゃん、だいすき！」をせがむようになった。「Mちゃん、だいすき！」とささやかれたMさんは取って置きの笑顔を浮かべ、その途端走り去った。そして、次第に遠く離れていても僕の顔を見かけると自分の耳を引っ張りながら走り寄ってくるMさんの姿が変わっていった。

その後、Mさんは耳を引っ張りながら近づく代わりに「カロリーメイト！」と叫ぶようになった。もちろんどこかでカロリーメイトを買ったことがきっかけだったのだとは思っているのだが、その時の意味はカロリーメイトを買って欲しいではなくなっていた。その叫びに応じて耳元で「Mちゃん、だいすき！」とささやけばそのカロリーメイトの連呼は止まったからだ。つまり、そのカロリーメイトの意味することは、「もっと心に愛のエネルギーを！」なのだ。

多動で衝動的、さらに発達に遅れがあり発語がない、母親の育児不安がきっかけで三才という年齢で入所し、すぐに母と死別、母親はMさんにきちんと大好きを伝える余裕も機会も無かったのだろう。こうして、「だいすき」の言葉は、彼の淋しい気持ちを支える心の杖として、大きな意味を持つようになった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

扉がガラッと開くたびに、Kさんは必ず振り返って「来た！」と言った。食事をしている、テレビを見ている「ガラッ」と扉の音がするたびに「来た！」と言っては振り返った。Kさんは、二歳から施設暮らしだ。養護施設を経て中学生の年齢で明星学園入所となっている。その頃大好きな歌は、ど演歌の「氷雨」、ちょっと歌詞を口ずさめば、彼の気持ちのありどころがわかる。

♪ 飲ませてください もう少し 今夜は帰らない 帰りたくない

誰が待つと言うの あの部屋で そうよ誰もいないわ 今では ♪

彼には、何年もの間、面会も帰省も無く、どこにいるかもわからない父や母を当てどもなく待つばかりの日々が続いていた。質が悪いのは面会の仕方だ。突然訪ねて来たかと思うとまた何年もの間、音信不通になる。ずっと会えないのなら諦めもつきやすいのだろうと思うのだが、諦めかけていた頃に顔を出すという面会の仕方が、彼に「来た！」と言わせていたのだ。砂粒のような確率に彼は期待していた。

その頃の彼、抓って蹴って噛みついた。「パーカ」「死んじまえ」と挑発的な罵詈雑言が口から飛び出し、唾も飛んだ。誰も彼のそばに行きたがらなかった。彼が廊下を通れば、職員も含めて皆がそそくさと逃げ出した。

そこで私は、彼を連れ立って外食に出かけた。とても他のお客さんがいるようなところでは無理だろうと、空いている店のさらに空いている時間帯を狙って出かけた。希望通りの五目ラーメンが出てくる。しかし、こ

ここで「バーカ」「死んじまえ」の一言、そうだねと小分け皿を貸して頂いて、ラーメンを取り分け冷ます。これで一旦は声が止まる。しばらくしてまた「バーカ」「死んじまえ」が始まる。ピーマン、嫌いなんだよねとピーマンをはじき出すと声が止まる。そしてまた始まる「バーカ」「死んじまえ」、お腹いっぱいになったんだね、残していいよ、これで声が止まった。連れ立って行った外食だったが、お互いに何となく後味の悪さを感じての帰園だった。しかし、この経験の後、私は意図的に彼に話しかけた。「昨日、Kさんといっしょにラーメン食べたね」と。彼に不足しているのは、家族や職員や仲間と「いっしょに」物事をしたという心のつながりの経験だ。それから「いっしょに散歩へ行ったね」「いっしょに旅行に行ったね」と私は意図的にいっしょにを強調して話しかけた。

おそらく彼の手や足や口は、彼の脳みそのコントロールを離れて勝手に動く、チック様の症状だ。一番困っていたのはおそらく彼だろう。しかし、その症状が彼をどんどん孤独に追い込んでいく。

彼はいつしか「いっしょ？」と尋ねるようになった。「そう、いっしょだよ」そんなやりとりが彼の心の杖だ。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

その頃のA子さん、お弁当持ちのハイキングに出かけても皆からぽつんと一人離れて食事をした。10m以上も先である。どんなに呼んでも近寄ろうとせず、頑なに孤立を選んだ。この孤立は自閉症の障がい特性をもって説明できるかもしれないが、その後のA子さんの歩みを見れば、それが大きな要素でないことは、はっきりしている。

皆の方に何度も誘おうとする私の手を拒否しながら彼女はつぶやいた。「かわいい？」と。

突然の言葉に驚いたが、彼女の伝えたいことは明白だった。

「私は可愛くないから、または、みんなから可愛く思われていないから、みんなの所にいっしょにいてはいけない」、これが彼女が孤立を選んでいる信念だった。皆に近づいて拒否され傷つくより、遠く離れて傷つかない道を選んでいたのだ。

その頃の彼女、ヒャーヒャーと大声を上げ、唾を吐きかけ、食堂では味噌汁の入ったお椀が天井まで飛んだ。好んでやっていることではないとはいえ、彼女の自己イメージは決して可愛いと言えるものではなかっただろう。年頃の女性とはかけ離れた姿にそう感じてしまう彼女の判断は決して間違いじゃない。

彼女は、かわいいと言われて、初めてそれがポジティブメッセージになる。素敵な服を着ていた時、「きれいだね」では彼女にメッセージは届かない。「かわいいね」と言われて、心に届くのだ。

ポロシャツとジャージ姿が、チェニックとレギンスに取って代わり、毎朝、口紅を差し、マニキュアを塗る、そんな暮らしを手に入れた時には、彼女は自然に皆の真ん中で弁当を食べることができるようになっていた。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

人は、人生を物語の中で生きている。それは、知的障がいがあろうがなかろうが、障がい重かろうが軽かろうが変わらぬ真実だ。

早期の母との死別が、「だいすき！」という言葉で心の杖にさせ、自分を訪ねて来てくれる人がいつ来るかわからない暮らしが「いっしょに」の言葉を心の杖にさせる。そして、積み重ねられた伝わらぬ思いが「自分にはかわいくない」を根拠もない信念にさせる。

彼らの人生を支えるフレーズを見つけることができれば、私たちの係わりの質は劇的に向上するだろう。声をかけるそのたった一言が、人生を変える魔法の言葉になるのだ。

「ご、ご」(ごめんなさいの意)を繰り返すYさんには、「あなたのせいじゃない」が、男性と会う時には光りものの装飾品を必ずつけるIさんには「きれい」が、そして、母一人子一人のYさんには「さすが長男」が魔法の言葉だ。彼らが何を望み、何を応援してもらいたいのか、魔法の言葉にはそれが凝縮されている。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設 明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>